

PICK UP MOVIE

『ほかげ』

2/2~

[2023年/日本/ビスタ/5.1ch/95分] G
監督・脚本・撮影・編集・製作：塚本晋也
出演：趣里、森山未來
配給：新日本映画社

©2023 SHINYA TSUKAMOTO/KAJYU THEATER

子どもが 戦争をみつめる

連日イスラエル軍がガザを攻撃するニュースが流されている。負傷し逃げまどう子どもたちの姿に胸が締め付けられる思いだ。この日本では、私はわずかでも戦争を経験した最後の年代ということになる。同級生のなかには戦争で父親を亡くした子が何人もいた。満州からの引揚げ時に自分は何回も捨てられそうになった、と親から聞いた話をつぶやく子もいた。

日本の15年戦争の末期、とりわけ市街地が空襲されるようになると、女性や子どもの被害者が膨大な数に上ったはずだ。けれど彼らのその後は、とりわけ親も家族も失った子どもたちについては、ほんのわずかな記録しか残っていない。いつの時代でも、弱者は記録を残す余裕などないのだ。そういう人たちの心情を、あの戦争が終わって80年にもなろうといういま、じっくりと描き出したのが、この「ほかげ」という作品だ。

戦争で独りぼっちになってしまった少年は、食べ物をかっぱらって生き延びている。ふと安心できそうとでも思ったのか、彼は居酒屋風の店に入り込む。だがそこでは、やはり家族を亡くした女性が身体を売って暮らしていた。行き場のない復員兵も、その店に安らげる場所を求めてやってくる。

偶然めぐり会った3人は、何とか助け合って暮らしていけないだろうかと思い始める。束の間の家族団欒にも似た時間が訪れもした。だが一歩外に出れば、そこは戦火に荒らされた焼け野原。誰もが今日を生きるのに必死で、3人がどんなにものがごとく真真正正に日々の糧を得ることなどできはしない。

この3人も周囲の人も皆が、戦争によって心に深い傷を負っている。そんな大人たちを、少年は終始じっとみつめている。この少年の眼差しにこそ、監督は深い思いを託したのではないだろうか。心の傷を抱えた者同士は慰め合うこともできるが、傷に触れた途端に関係は壊れてしまう。その危うさのなかで、少年は生きる道を探っているのだろう。

戦争によって引き起こされるのは悲惨だけだ。狂ってしまった男、売られていく子ども、無気力にうずくまる人の群れ、闇市での争い。しかしそのどれをも監督は真正面から見据えて、心に沁みる画像を創りだしている。戦争をみつめて作品を撮り続けてきた塚本監督ならではのと思う。

観終わってこんな思いが浮かんだ。私たちは、あるいは父母や祖父母たちは、まさにこういう時代を生きてきた。それで私たちはこれからどう生きていくのだろうか。そう心に問いかけずにはいられない作品だと思う。

プロフィール

田村志津枝

：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。

